

令和 6 年 9 月 17 日現在

機関番号：14503

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20025

研究課題名（和文）『愚管抄』の基礎的かつ享受史的研究

研究課題名（英文）Fundamental and historical research on "Gukansho"

研究代表者

児島 啓祐 (KOJIMA, Keisuke)

兵庫教育大学・学校教育研究科・講師

研究者番号：90963439

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本中世天台宗の僧侶・慈円（1155-1225）著述の歴史書『愚管抄』の諸本（複数の写本）の整理分類を行い、古態（著者が書いた原本に近い本文）を残すと考えられる善本に関する再考を促し、新たな底本（研究の基準となる、信頼できる写本）の選定を行う基礎作業に着手することができた。加えて、本文史（本文変容の歴史）・伝来史（写本所有者の歴史）を解明する享受史的研究（読者の歴史を解明する研究）の可能性を開拓することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、以下三点の問題解明に取り組んだ。『愚管抄』の写本はいかに分類が可能か、いかなる伝本系統図が描けるか、『愚管抄』の古い姿を多くとどめているのはどの写本なのか、『愚管抄』はどのように読まれ・伝来したのか。上記三点を考察する意義は、中世文学史・思想史を究明する上で必読文献である『愚管抄』の研究基盤を構築する点に認められる。『愚管抄』の基礎的研究に限っては半世紀余りほぼ進展が見られず、近年の坂口太郎氏（高野山大学）の研究によってようやく光が当てられた分野である。本研究は氏の研究を承け『愚管抄』研究の基盤を固めつつ、中近世における読者の歴史をも見出すことを目指したものである。

研究成果の概要（英文）：In this study, we organized and categorized various books (multiple manuscripts) of the history book "Gukansho" written by Jien (1155-1225), a Buddhist monk of the Tendai sect in medieval Japan. We were able to encourage a reconsideration of good manuscripts that are thought to preserve the original text (main text) and begin the basic work of selecting a new base manuscript (a reliable manuscript that will serve as a standard for research). In addition, we were able to develop the possibility of historical enjoyment research (research that elucidates the history of readers) that elucidates the history of the text (the history of changes in the text) and transmission history (the history of the owners of the manuscript).

研究分野：中世文学

キーワード：愚管抄 慈円 諸本分類 肥前島原松平文庫蔵本 天理図書館蔵本 文明本（図書寮本） 享受史 伝来史

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて活躍した撰家出身の天台僧・慈円著述の代表的歴史書『愚管抄』は、政治史、思想史、宗派史、日本文学などの中世日本の多岐に亘る研究分野から重宝される基本資料である。『愚管抄』の研究は、『日本古典文学大系 愚管抄』(岩波書店 一九六七年 以下、『大系』)を参照するのが通例である。

ところが近年、『大系』には本文校訂の大幅な見直しが必要な箇所や誤読箇所が、多数見出されるという重要な提言が坂口太郎氏によって行われた(坂口太郎「『愚管抄』校訂私考」(『古代文化』六八 二 二〇一六年九月)。つまり『愚管抄』研究は、基礎的研究が不十分な『大系』に負うところが大きいのである。そもそも『愚管抄』の写本調査・諸本分類・善本選定のような基礎的研究は、一九六〇年代の研究を最後に、ほぼ手つかずのまま進んでいない(塩見薫「愚管抄のカナについて」(『史林』四三 二 一九六〇年三月)。

以前着手した「慈円における学問体系の研究」(特別研究員奨励費 21J10528)においては、『愚管抄』の基礎的研究の見直しを行うことに決め、坂口太郎氏の研究を承け、写本の調査から出発することになった。その結果、『大系』の誤りの多さは、校訂の問題ではなく、底本に起因することを見出すに至った。『大系』の底本は、島原市立図書館・肥前島原松平文庫所蔵の写本である(以下、島原本)。島原本の評価は半世紀前に、『大系』の校注者・赤松俊秀氏によって、一揃いの「完本」であり、古態が認められる「善本」である(赤松俊秀『日本古典文学 愚管抄』(岩波書店 一九六七年一月 一二頁)と定められた。

しかしながら島原市立図書館における調査の結果、島原本は「完本」・「善本」ではないことが判明した。島原本は、近世前・中期の三種類の異なる写本を寄せ集めた取り合わせ本であり、「完本」ではなかった。後世の大幅な校訂を経ており、古態は認められず「善本」ではないという結論に至った(児島啓祐「『愚管抄』本文再考 島原本の性格と意義」(『中世文学』六七 二〇二二年六月))。

2. 研究の目的

本研究の目的は以下三点にまとめられる。

諸本の新旧を明らかにし、『愚管抄』の伝本系統図を作成すること。

を踏まえ、古態を有する『愚管抄』写本を見出し、底本を新たに選定すること。

を踏まえ、中世後期から近世中期にかけての『愚管抄』の本文史・伝来史を構築し、中近世における『愚管抄』観や享受のありようを解明すること。

3. 研究の方法

本研究では、本文の比較研究に加えて、書物の形態にも着目し、中世末期～近世前中期における『愚管抄』本文の変容や伝来の史的意義を考察する手法を採用する。このことは内容及び中世前期に集中する従前の『愚管抄』研究とは異なる視点を提示する意義がある。こうした方法を通じて、『愚管抄』の諸本分類を行い、より精密な伝本系統図を作成すること、善本を見出し、新たに底本の選定を行うこと、諸本の関係性を見出し、近世の大名や儒者たちの学問交流の形跡を捉え、中世末期～近世前中期の学問史の一面を浮かび上がらせること、以上三点の解明を目指すものである。

4. 研究成果

令和四年度においては、和田琢磨氏蔵本（以下、和田本）の紹介と、その諸本における位置づけ及び伝来史的意義についての考察を行った。近世中期の写本である和田本は蔵書印から多武峰の学僧が所持していたものと考えられ、この本と他の本との関係性を解明することは、『愚管抄』の近世における享受の一端を解明することに繋がるため、享受史研究の一環として本研究を実施したのである。この研究ではまず、『愚管抄』の諸本比較を行った。その結果、和田本が天理本と密接な関係にあることに気づいた。近似性を見出した上で、両者の書写態度の相違点を調査した。二本の書写態度の違いからわかったことは、天理本と和田本は一部巻が入れ替わって伝来したということである。それらは、多武峰の学僧光栄が行取りまで意識して書写した光栄本（天理本巻一～五・七、和田本巻六）と、行取りは意識しておらず漢字表記を多くした重本（和田本巻五・天理本巻六）に整理できる。光栄本及び重本の原本注記（傍記・貼紙）にも注目すると、この二本が共通の親本を持つ、兄弟の関係にあることがわかった。二本が底本としているのが、青蓮院尊証親王が所持していた本（成實堂文庫所蔵）で、かつて水戸光圀から寄進されたものである（光圀本は坂口太郎氏（高野山大学）の御教示によりその存在を知ったものである）。この二本と親本の比較対照を通じて、本文の表記や行取りは残しているものの、親本を積極的に校訂し本文を改変しているのが光栄本であり、表記は変更しているものの光圀本の本文を忠実に写しているのが重本であると位置づけられた。本文史上では後出のものとなる、江戸中期のこの二本の意義は『愚管抄』の校訂研究に益する点にあるとはいえない。しかしながら、光圀本を基に似た形態の写本が同じ場所で複数回作られていたことになり、近世中期の青蓮院や多武峰における光圀本を尊重する態度がうかがえる点において伝来史的意義が認められるといえる。さらに光圀本が贈られた尊証に関して、『華頂要略』を中心に調査した。尊証と光圀との密接な関係を指摘した上で、光圀本は両者の親密な交流を示す写本であり、それが正本のように権威付けられ青蓮院や多武峰に伝来し書写されてきた歴史を見出した。このような光圀本やその影響力を伝える光栄本や重本は、近世における『愚管抄』享受の実態を探る上で不可欠な本であると位置づけられる。

令和五年度においては、『愚管抄』の古筆切七点（内二点は、坂口太郎氏（高野山大学）の御教示による）を俎上に載せ、諸本との本文比較に取り組み、従来ほぼ不明であった中世の享受史の問題に光を当てた。断簡資料七点の本文及びその書誌的特徴を手がかりに、本文表記及びその系統の歴史と、書物の形態からうかがえる中世の『愚管抄』認識について考察した。従来、正和二年の本奥書を有する桓武系零本A類（阿波本・島原本）が漢字・片仮名交じり表記であることを根拠に、『愚管抄』の原態は平仮名表記ではなく片仮名表記であることが有力視され、国史大系や日本古典文学大系の校訂では、底本にまみ混じる平仮名表記は全て片仮名表記に改められた。しかし鎌倉期から南北朝期の古筆切七点が全て平仮名表記であることや、現存最古の書写本、図書寮本の親本が平仮名本であったことを踏まえると、片仮名本古態説は再考の余地があることを指摘できた。さらに本文表記の史的展開を辿れば、鎌倉～南北朝期の平仮名表記（古筆切七点）から、江戸初期・前期の諸本における平仮名・片仮名混交表記（文明本系及びその校訂本）を経て、江戸中期において初めて片仮名表記に統一された本文である光圀本系が出現することを示すことができた。

古筆切七点の本文は、従来善本と見られ日本古典文学大系の底本とされた桓武系零本A類ではなく、文明本系や、これまでほとんど顧みられることのなかった漢字・平仮名交じり表記の巻一・三を有する彰考館本系に近い系統であった（ただし、彰考館本に関しては、巻

一及び三がいかなる本を底本としているかは今後の課題である。巻四～七においては林家本や島原本とかなり近い本文を有しているため、彰考館本全体が古態を有するものとは考え難い。桓武系零本A類は、古筆切の本文と比べると、漢字が多くあてられ、助詞や助動詞が脱落していたため、今後の校訂においては文明本系の再評価が重要になることを提示することができた。さらに古筆切の形態面(巻物切や押罫)に注意を向け、中世の『愚管抄』が格式の高い装訂で伝えられていたことが明らかになった。また本研究では、『愚管抄』が『本朝書籍目録』の「雑抄」に含まれ真名の学問世界に近接する書物という認識があり、それを踏まえて前述のような本文史が展開したということが推測できた。

令和五年度は基礎的かつ享受史的研究のみならず、『愚管抄』の内容そのものの分析も進展した。特に『愚管抄』の災厄に関する認識について、その一部を解明することができた。『方丈記』の叙述とは異なり、『愚管抄』における災厄は「不思議」な現象ではないという点に注意し、読者に対し、災厄の原因は何か、いかに対処すべきかが詳細に開示されていることが特色であることを指摘した。従来、津ノ井舞氏は「『方丈記』論 五大災厄の描写をめぐって」(『緑岡詞林』三九号 二〇一七年三月)において、鴨長明には災厄の原因究明の姿勢が見出せないことを指摘し、説明しがたい不思議なる現象として災害を描写していると見た。木下華子氏は「災害を記すこと 方丈記「元暦の大地震」について」(『日本文学研究ジャーナル』一三号 二〇二〇年三月)において五大災厄の内、地震のみ元号を示さない点に着目した。「元暦」は、平家滅亡のしるしであり、長明は、平家滅亡の記憶とは切り離して、この地震を記述したと論じた。『方丈記』は、一連の家屋崩壊にかかわる有為転変のなかに無常を捉えようとする、鴨長明による平安末期の災害史叙述を志向していると捉えたのである。『愚管抄』において「不思議」の語は、花山院出家、実朝暗殺など人為的な出来事の叙述の中に批判的な言辞とともに現れるが(「不思議」八例、「不可思議」六例)、天変地異関連の記事においては一切使用されない。この点は、小林智昭氏が「方丈記「世ノ不思議」考 平家物語・古事談との関連をめぐって」(『専修国文』七号 一九七〇年一月。後に『続中世文学の思想』笠間書院 一九七四年に所収。)において天変地異を「不思議」と表現することは『平家物語』や『古事談』の事例においては一般的とは言い難いと既に指摘したことと共通するものである。『愚管抄』によれば、災厄は「不(可)思議」なものではなく、むしろ深く思考すべき歴史的イベントである。すなわち災厄記事には慈円の意図や思想が色濃く表れていると考えられる。したがって『愚管抄』における慈円と同時代の災厄記事は、従来引用されてきたような平安末期の災害認識一般を示す史料としてではなく、著者が企図した固有の災異論として読まれるのが妥当という結論に至った。本研究により明らかになった慈円の災異論の特色は、後鳥羽院の護持僧、大懺法院における供養の担い手、以上の視点を基軸に、特定の陰陽師との学問交流を背景に、読者への勧学が意識され叙述される点である。以上の ~ の諸要素が複合的に看取される慈円の災異論には、総じて台密僧としての思想及び活動が如実に投影されていると考えられる。従来の歴史学、民俗学的アプローチによる災害観研究は、普遍性を志向している分、複合的要因が絡み合いながらその都度構築されていく災害観は見出しがたい。むしろ、災害を記す一人一人の記録者の独自性・固有性に重点を置いて考えてみることで、文学研究ならではの災害観研究・災害史研究、すなわち災害観はどのように作られ、いかに語られたかを考えることが今後の研究においては重要になってくると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 児島啓祐	4. 巻 124 1
2. 論文標題 光圀本系『愚管抄』伝来考：成實堂文庫本・天理本・新出写本の関係をめぐって	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『國學院雑誌』	6. 最初と最後の頁 43-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 児島啓祐	4. 巻 124-8
2. 論文標題 『愚管抄』の本文表記と装訂 古筆切の検討を通じた中世の享受に関する一考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『國學院雑誌』	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 児島啓祐	4. 巻 58
2. 論文標題 慈円の災異論と台密修法 『愚管抄』の災厄記事を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『説話文学研究』	6. 最初と最後の頁 154-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------